

ふるさと歴史シンポジウム

寺麿松末がよみいま



石・川の野を拓く白鳳人！
大寺の巨塔のナゾにせまる

野々市町

野々市町教育委員会

いまよみがえる末松廃寺

い
ま
よ
み
が
え
る
末
松
廃
寺

目次

シンポジウムの日程	1
パネリスト・司会者略歴（報告順）	2
略年表（原始～中世）	4
掘り出された石川平野の遺跡と末松廃寺	6
1 石川平野の開拓史　－縄文から中世まで－	8
2 末松廃寺の調査成果	15
3 出土した遺物	19
4 まとめ	20
基調講演	
古代石川平野（手取川扇状地）の開発と末松廃寺（金田 章裕）	21
報告 1	
末松廃寺と飛鳥・白鳳の寺院（村上 詎一）	37
回 想	
末松廃寺と父高村誠孝（高村 宏）	45
報告 2	
瓦が語る古代の文明開化（木立 雅朗）	51
報告 3	
手取扇状地における飛鳥時代の移民集落（望月 精司）	65
報告 4	
古代の家族と女性・児童（服藤 早苗）	79

いまよみがえる末松廃寺

- 開催日 平成21年11月15日(日) 午前10時～午後4時30分
- 会場 野々市町情報交流館カメラア 2F ホール椿
- 主催 野々市町・野々市町教育委員会
- 後援 石川県教育委員会・石川県史跡整備市町協議会
石川考古学研究会・金沢放送局

シンポジウムの日程

10:00～10:05	開会あいさつ 栗 貴章 (野々市町長)
10:05～11:05	基調講演 「古代石川平野 (手取川扇状地) の開発と末松廃寺」 金田 章裕 (きんだ あきひろ)
11:10～11:40	報告 1 「末松廃寺と飛鳥・白鳳の寺院」 村上 訶一 (むらかみ じんいち)
11:45～12:05	回 想 「末松廃寺と父高村誠孝」 高村 宏 (たかむら ひろし)
12:05～13:00	昼 食
13:00～13:30	報告 2 「瓦が語る古代の文明開化」 木立 雅朗 (きだち まさあき)
13:35～14:05	報告 3 「手取扇状地における飛鳥時代の移民集落」 望月 精司 (もちづき せいじ)
14:10～14:40	報告 4 「古代の家族と女性・児童」 服藤 早苗 (ふくとう さなえ)
14:40～14:55	休 憩
14:55～16:20	パネルディスカッション 「いまよみがえる末松廃寺」 コーディネーター 吉岡 康暢 (よしおか やすのぶ) パネリスト 金田 章裕、村上 訶一、服藤 早苗 木立 雅朗、望月 精司
16:20～16:25	講 評 谷内尾 晋司 (石川考古学研究会々長)
16:25～16:30	閉会あいさつ 村上 維喜 (野々市町教育委員会教育長)

■パネリスト・司会者略歴(報告順)

金田 章裕(きんだ あきひろ)

1946年富山県に生まれる

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構長

京都大学名誉教授 (元副学長)

専 門：歴史地理学

主要論著：『条里と村落の歴史地理学的研究』(大明堂)

『古代景観史の探求』(吉川弘文館)

『古地図からみた古代日本』(中央公論社)



村上 詔一(むらかみ じんいち)

1941年大阪府に生まれる

公益財団法人 文化財建造物保存技術協会 審議役

元文化庁文化財監察官 (末松廃寺跡発掘調査に従事)

専 門：日本建築史、文化財保存

主要論著：「歴史的町並みの保存」『新建築学大系50』(彰国社)

「霊廟建築」『日本の美術』(至文堂)

『日本文化のかたち百科』(岩波書店)



高村 宏(たかむら ひろし)

1934年野々市町末松に生まれる

史跡末松廃寺跡保存会員としてその保存と景観美化などに尽力



木立 雅朗(きだち まさあき)

1960年石川県七尾市に生まれる

立命館大学文学部教授

専 門：考古技術史

主要論著：「加賀・能登の古代仏教遺跡－瓦研究偏重からの脱皮と『堂』・山寺の評価によせて－」『北陸古代土器研究』第10号（北陸古代土器研究会）

「瓦範についての覚書」『明日をつなぐ道』（高橋美久二先生追悼文集刊行会）

「須恵器坏類の製作実験ノート2－ヘラ起こし技法による丸底化と「正円の沈線」をめぐる－」『吾々の考古学』（和田晴吾先生還暦記念論文集刊行会）



望月 精司(もちづき せいじ)

1960年宮城県に生まれる

小松市教育委員会埋蔵文化財調査室担当参事兼室長補佐

専 門：考古古代史

主要論著：「北陸西部地域における飛鳥時代の移民集落～移民系煮炊具と竪穴建物構造、集落経営の視点から～」『日本考古学』第23号（日本考古学会）

「日本海地域の古代土器生産」『日本海域歴史大系』第二巻 古代篇Ⅱ（清文堂出版）

「北陸・信越地域の土器」『考古資料大観』3巻（弥生・古墳時代 土器Ⅲ）（小学館）



服藤 早苗(ふくとう さなえ)

1947年愛媛県に生まれる

埼玉学園大学人間学部教授（学部長）

専 門：日本史、家族史、女性史、ジェンダー論

主要論著：『平安王朝社会のジェンダー』（校倉書房）

『平安朝 女の生き方』（小学館）

『平安王朝の子どもたち』（吉川弘文館）



吉岡 康暢(よしおか やすのぶ)

1934年石川県金沢市に生まれる

国立歴史民俗博物館名誉教授

専 門：陶磁社会史

主要論著：『中世須恵器の研究』（吉川弘文館）

『新修国分寺の研究3』（共著・吉川弘文館）

『琉球出土陶磁社会史研究』（真陽社、近刊）



略年表（原始～中世）

東 洋 史	日 本 史	野々市町関連事項
前3000ごろ黄河流域に新石器文明 2500ごろインダス古代文明の初め 2000ごろアリア人、西北インド侵入開始 1400ごろ〔中国〕に殷興る 1027ごろ〔中国〕周興る 771〔中国〕東周興る 771～403〔中国〕春秋時代 566ごろ～486ごろ〔インド〕シャカ（仏教） 550～479〔中国〕孔子（儒教） 403～221〔中国〕戦国時代 317ごろ〔インド〕マウリア朝成立 273～232〔インド〕アショーカ王 221〔秦〕始皇帝中国を統一 202〔前漢〕劉邦（高祖）、前漢の成立 108〔前漢〕武帝、朝鮮を討ち四郡を設置 97〔前漢〕司馬遷「史記」成る 28ごろ〔インド〕アーンドラ朝デカン以北を統一 後8 前漢滅亡、王莽の新王朝 25〔後漢〕劉秀（光武帝）、後漢の成立 45〔インド〕クシャナ朝成立 68中国に仏教伝来 140～170ごろ〔インド〕カニシカ王 166ローマ皇帝の使者、中国に至る 208〔中国〕赤壁の戦い 220後漢滅び、三国（魏・蜀・呉）分立 226ササン朝ペルシア興る 265〔西晋〕晋王司馬炎（武帝）、帝を称す 316西晋滅び、五胡十六国時代始まる 375～413〔インド〕チャンドラ＝グプタ二世 383〔中国〕淝水の戦い 386北魏の建国 399～416〔中国〕法顕のインド旅行（仏国記） 420～589〔中国〕南北朝時代 460〔北魏〕雲崗の石窟掘り始める 485〔北魏〕均田制を施行 493〔北魏〕竜門の石窟掘り始める 531～579〔ペルシア〕コスロー一世 552〔北アジア〕突厥帝国の成立 581北周倒れ、隋興る 589〔隋〕中国を統一 606～647〔インド〕ハルシャヴァルダナ 618〔唐〕李淵（高祖）、唐を興す 624〔唐〕均田制を布く 624～49〔唐〕太宗・・・貞観の治 629～45玄奘三蔵のインド旅行（大唐西域記） 660百済滅ぶ 663白村江の戦い（日本軍敗退） 668高句麗滅ぶ 671～95義浄のインド旅行 676〔朝鮮〕新羅の統一時代始まる 690～704〔唐〕則天武后、実権を握る 698渤海の建国（大祚榮）	○先土器文化 ○縄文式文化 ○弥生式文化 後57倭の奴国、後漢に使者を出す、印綬を受く 107倭国王、後漢に使者を出す 239倭の邪馬台国女王卑弥呼の使者、魏に至る ○古墳文化 266倭の女王壱与の使者、晋に至る 369日本軍、朝鮮半島南端支配（任那の成立） 391日本軍、朝鮮出兵、百済・新羅を服属（好太王碑） 413この年より倭国の使者、しばしば中国南朝に至る 430宋に朝貢 552ごろ（一説、538）仏教伝わる 562任那の日本府滅ぶ 593～622聖徳太子の摂政 593難波四天王寺創建 600隋に使す（隋書倭国伝による） 604憲法十七条を制定 607法隆寺創建 630遣唐使の初め（犬上御田歙） 645大化改新（大化元年一年号の初め） 652班田収授法施行 658阿倍比羅夫、蝦夷を討つ 667近江大津京に遷都 672壬申の乱。飛鳥京に遷都 694藤原京に遷都 701大宝律令成る708和同開珎を作る 710平城京（奈良）に遷都 712「古事記」成る718養老律令成る	押野大塚遺跡・御経塚シンデン遺跡 御経塚遺跡 押野タチナカ遺跡・高橋セボネ遺跡 御経塚シンデン古墳群 上林古墳・末松古墳 692越前国初見 扇状地中央部の開発進む 上林・新庄・栗田・三納遺跡群

東洋史	日本史	野々市町関連事項
712～56〔唐〕玄宗皇帝（開元の治） 735新羅の半島統一成る 755～63〔唐〕安祿山・史思明の反乱	720「日本書紀」成る723三世一身法を定む 743墾田の永世私有許可 752東大寺大仏開眼 794平安京（京都）に遷都	
762〔唐〕詩人李白死（701～） 770〔唐〕詩人杜甫死（712～） 780〔唐〕兩税法を行う	801坂上田村麻呂、蝦夷を平らぐ 805最澄帰朝し、天台宗を始む 806空海帰朝し、真言宗を始む 810初めて藏人所をおく	813東大寺領横江荘
846〔唐〕詩人白居易（樂天）死（772～） 875～84〔唐〕黄巢の乱 907唐滅び、朱全忠自立ー〔後梁〕 907～60〔中国〕五代十国時代	816檢非違使をおく 858藤原良房、摂政となる（人臣摂政の初め） 887藤原基経、関白となる（関白の初め） 894遣唐使を停止	823越前国から江沼・加賀郡を分け 加賀国設置 （加賀・石川・能美・江沼4郡）
916〔北ア〕耶律阿保機即位、契丹興る 918〔朝鮮〕高麗の建国（王建） 926〔満州〕渤海滅ぶ 935〔朝鮮〕新羅滅び、936高麗、半島を統一	960〔宋〕北宋興る（趙匡胤ー太祖） 979〔宋〕中国を統一（中央集権的君主独裁制） 1004〔宋〕澶淵の盟成る。契丹と和す。	
1037セルジューク＝トルコ興る 1038〔北ア〕西夏興る 1048ゴール朝興る	992初めて莊園整理の令を下す 905「古今和歌集」成る 939平将門・藤原純友の乱（承平・天慶の乱）	
1055〔西ア〕セルジューク軍バグダード入城 1069〔宋〕王安石の改革（1076失脚） 1084〔宋〕司馬光「資治通鑑」完成	紫式部「源氏物語」（11世紀初に完成） 1016～27藤原道長およびその一族の全盛時代 1019刀伊の賊（女真）、九州を侵す 1051前九年の役（源頼義、安倍氏を討つ）	
1115〔満洲〕女真人完顔阿骨打、金を建国 1125遼、金に滅ぼされる 1126北宋、金に滅ぼされる（翌年宋室南渡） 1132〔中ア〕西遼興る	1069記録莊園券契所をおく 1073院の藏人所をおく 1083後三年の役（源義家、清原氏を討つ） 1086白河天皇、院政の初め	武士団の台頭と扇状地の再開発 林氏・富樫氏 1152白山宮が延暦寺の末寺となる 1154林氏、白山宮と対立し林光家 投獄される
1153〔金〕燕京（今の北京）に遷都 " 1157〔西ア〕ホラズム盛んとなる。セルジューク＝トルコ分裂、 事実上の滅亡"	1124中尊寺金色堂建立 1156保元の乱 1159平治の乱 1167平清盛、太政大臣となる 1175法然、浄土宗を開く	1183～85源平の戦い 林・富樫氏、木曾義仲に従い上洛する も源義経に敗れる
1193〔インド〕ゴール朝、北インドを征服 1206〔蒙古〕テムチン、蒙古を統一し、チンギス汗を称す	1180以仁王の令旨。源頼朝挙兵、木曾義仲挙兵 1185平氏滅ぶ。守護・地頭の設置 1192源頼朝、征夷大將軍となり、鎌倉幕府を開く 1205「新古今和歌集」成る 1219源氏滅ぶ。北条氏の執権政治始まる 1221承久の変。六波羅探題の設置 1224親鸞、「教行信証」を著す（真宗の初め） 1232貞永式目（御成敗式目五十一条）制定	林氏（宗家）は上皇方（後鳥羽上皇） につき没落し代わって富樫氏が台頭
1219～1224〔蒙古〕チンギス汗の西征 1227西夏滅ぶ 1234金滅ぶ 1236～42〔蒙古〕バツの東ヨーロッパ征服	1253日蓮、法華宗を始む 1274文永の役 1281弘安の役	1263富樫家尚、石川郡押野荘に大 乗寺創建
1260〔蒙古〕フビライ即位（世祖） 1271元朝始まる 1271～95マルコポーロの東方旅行 1295〔西ア〕オスマン＝トルコの建設（諸説あり）	1297永仁の徳政令 1317両皇統（大覚寺・持明院）交互即位の議起る	1312地名「野市」の初見（三宮古記）
1321〔中ア〕チャガタイ汗国分裂	1324正中の変 1331元弘の変 1333鎌倉幕府滅ぶ 1334建武中興 1338足利尊氏、將軍となり、室町幕府を開く 1349足利基氏、鎌倉公方となる	1335富樫高家、守護となる 1346富樫家善（押野殿）、押野荘の 土地を大乗寺に寄進 1350富樫高泰、高安軒を開く 1358僧唯性、押野の上宮寺創建
1351〔蒙古〕紅巾の賊、乱を起こす 1368〔明〕元倒れ、朱元璋（太祖）、明を興す 1369〔西ア〕チムール帝国の成立	1392南北朝の合一成る 1397金閣寺建立 1399応永の乱（大内義弘挙兵、敗死） 1401足利義満、明に通交	
1392〔朝鮮〕李成桂の朝鮮建国 1395〔西ア〕チムール、西アジアを統一 1402〔西ア〕アンゴラの戦い 1402～24〔明〕世祖（永楽帝）	1426近江坂本の馬借一揆、京都に乱入	

掘り出された石川平野の遺跡と末松廃寺

位置と環境 末松廃寺跡は、石川県のほぼ中央に位置する野々市町の南西端、末松2丁目地内に所在し、標高38m前後を測る手取川扇状地の扇央部にあたる。発展著しい当町にあって、周辺は農村住環境活性化事業の施行等により緑豊かな景観を保持している貴重な地区であり、国道157号線鶴来バイパスや石川県立大学の整備を経た今も町域のオアシスとしてどこかやさしい空気を醸し出している。史跡公園として整備された本遺跡も、遠足を含めた課外学習の場として活用されており、特に春は隠れた桜の名所として近隣住民に親しまれている。

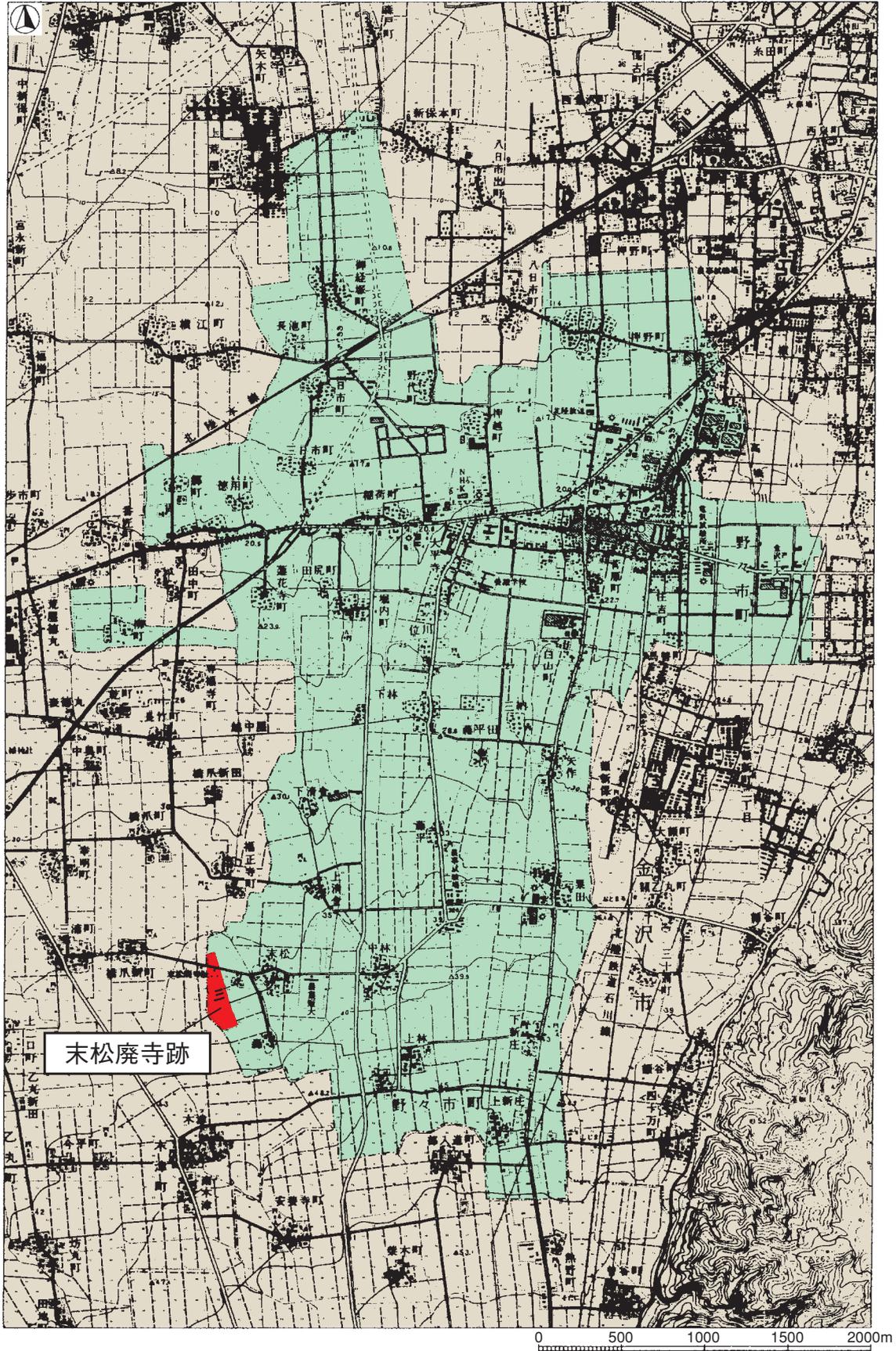
これまでの調査 末松廃寺は、江戸時代からその存在が知られており、加賀藩士津田鳳卿が1840（天保11）年までに本遺跡を訪れ、塔の心礎を計測し、これが地元では「唐戸石」と呼ばれていたことを記録に残している。その後、1888（明治21）年にはこの心礎は末松の大兄八幡神社に運び込まれ、手水鉢に転用された。1911（明治44）年より始まった耕地整理事業では、多くの瓦や土器が出土したと伝えられている。しばらく時をおいて、大正時代に入ると石川県史跡調査嘱託として赴任していた上田三平が1921（大正10）年に現地調査をおこない、心礎の計測などをおこなっている。

昭和に入ると、1937（昭和12）年に鑄木勢岐（石川県立金沢第一中学校教諭）を担当者として、塔周辺の発掘調査をおこなっており、同年上田三平が瓦散布地の試掘をおこなった。この結果を受け、富奥村長小林千太郎が内務・文部両大臣に史跡指定の要望書を提出した。翌1938（昭和13）年には上田三平が史跡指定に必要な書類、図面、写真などの作成を指示し、1939（昭和14）年9月7日に文部省から「末松廃寺跡」として史跡に指定され、永く後世へ守り伝えられることとなった。石川県では加賀市法皇山横穴群や狐山古墳、七尾市七尾城に次ぐ4番目のことである。その後、1961（昭和36）年に地元の高村誠孝氏により金堂推定地の西側水路より銀製の和同開珎が採取され、「廃寺の全容を解明したい」という機運が一気に高まった。これを受けて、1963（昭和38）年には石川考古学研究会により試掘・測量がおこなわれ、1966・67（昭和41・42）年には奈良国立文化財研究所技官を担当者とする末松廃寺調査団により内容確認のための本格的な発掘調査がおこなわれた。その結果、白鳳時代の創建とみられる塔、金堂、築地などが確認され、これがいったん廃絶されたあとしばらく間をおいて再建された可能性が高いことが指摘された。また、東に塔、西に金堂を配する法起寺式の伽藍配置を採用した寺院であったことも判明した。この発掘調査の成果を受けて、1969（昭和44）年に史跡の追加指定が行われ、総面積は21,235.5㎡となった。

調査終了後の1968（昭和43）年から1971（同46）年にかけて、指定地の公有化や



復元された塔跡と心礎



野々市町と末松廃寺（地図は昭和45年当時）

公園としての整備、収蔵庫の建設が行われ、本遺跡の整備が完成した。



発掘調査風景



金堂跡の瓦堆積



和同開珎 銀錢

和同開珎 銀錢

法量

外縁径 24.4mm 内郭 6.9mm

縁厚 1.4 mm 重量 4.06g

品質

銀 88.66% 硫黄 9.01%

その他塩素・カルシウム・鉄・銅等

和同開珎は708（和銅元）年に日本で铸造、発行された錢であり、我が国で最初の流通貨幣であるといわれる。特に銀錢は708年5月に発行され翌年8月に廃止された铸造・流通期間の非常に短いものであり、大変貴重なものである。

平成19年2月22日町指定文化財

1 石川平野の開拓史 ー縄文から中世までー

本遺跡の位置する地域は、当町でも御経塚地区と並んでもっとも遺跡密度の高い場所であり、確認されているだけでも白山市道法寺町から野々市町柳町付近にまで手取川の流れによって形成された細長い島状微高地に乗るように、各時代の集落遺跡が断続的に連なっている。ここではもう少し視野を広め、各時代の遺跡の動向をその地勢等の諸条件を加味した上で再確認していく。

縄文時代 扇央部におけるこの時代の遺跡分布は極めて希薄であり、縄文時代にまでさかのぼる遺跡は現在確認されている限り白山市に位置する晩期後半の長竹遺跡と、同時期の配石遺構などを伴う乾遺跡の二例のみである。反面、扇端部や金沢市西部に広がる沖積低地に目を向けると、野々市町の御経塚遺跡をはじめとして新保チカモリ遺跡や中屋遺跡、米泉遺跡など周辺



史跡末松廃寺跡全景

の中核ともいえるべき大きな集落が長期間にわたって営まれている。これは、後者が標高6～10mの低地に立地し、地下水の自然湧水地帯にあたることに加え、小河川により形成された微高地と低湿地が交互に入り組んだ地形により、一帯が植物・動物質食料や暮らしに必要な材料の供給源である落葉広葉樹と照葉樹が混合する豊かな森を形成していたことによるものと考えられる。このほか、野々市町の上林や栗田など、標高40m前後を測る扇央部で実施された過去の発掘調査でもこの時代の土器や石器などが出土しているが、いずれも少量であり、住居跡などの生活の痕跡までは確認されていない。このことについては、食料採取など人々の生業に関わる移動と、それに伴う出作り小屋的なものの存在が想定されている。



史跡御経塚遺跡の復元住居

弥生時代 弥生時代に入ると、周辺のみならず全県規模で遺跡の確認数は減少する。栗田遺跡では、弥生時代初頭の九州系の土器が数点出土しているが、あくまで客体的な土器の一部に過ぎず、その出土状況も扇央部における縄文土器の様相に酷似する。その後、前期になると、扇央部では上林遺跡や末松遺跡、遺構を伴う乾遺跡があり、扇端部や沖積低地では御経塚遺跡や押野タチナカ遺跡、三日市A遺跡などでも土器の出土が確認されている。しかしそのほとんどが遺構等の明確な実体を伴わない、極めて少量の出土にとどまっており、縄文時代晩期の集落の大きな広がりとは対照的である。また、その立地も同一遺跡の範囲内でも規模を縮小し、より河川に近い場所へ移動する傾向がみられる。これは、初期農耕を受け入れたことにより、集落を営む場所を選ぶ要件の変化を物語るものであろう。続く中期に入ると、県内では羽咋市吉崎次場遺跡や小松市八日市地方遺跡など地域の拠点と思われる大きな集落が営まれるようになるが、扇央部では皆無に等しい。沖積低地では、比較的まとまった土器が出土した金沢市矢



周辺の遺跡（『末松遺跡』2005に一部加筆）

周辺の遺跡一覧

番号	名 称	所 在 地	時 代
1	田中ノダ遺跡	白山市 田中町	弥生、古墳
2	専福寺遺跡	白山市 専福寺町	中世
3	乾町遺跡	白山市 乾町	縄文～近世
4	高田遺跡	白山市 専福寺町	縄文、平安
5	三林館跡	野々市町 下林	近世(安土桃山)
6	長竹遺跡	白山市 長竹町	縄文、古墳、平安、中世、近世
7	橋爪遺跡	白山市 橋爪町	縄文、弥生、中世、近世
8	西方寺跡	白山市 幸明町	近世(安土桃山)
9	橋爪ガンノアナ遺跡	白山市 橋爪町	奈良、平安
10	橋爪松の木遺跡	白山市 橋爪町	中世
11	幸明遺跡	白山市 幸明町	奈良、平安
12	三浦遺跡	白山市 三浦町	弥生、古墳、奈良、平安、中世
13	三浦常在光寺跡	白山市 三浦町	中世(鎌倉)
14	粟田遺跡	野々市町 粟田、中林	縄文、奈良、平安、中世、近世
15	清金アガトウ遺跡	野々市町 上清金	縄文、弥生、奈良、平安、中世
16	末松信濃館跡	野々市町 末松	中世
17	末松福正寺遺跡	野々市町 末松	古墳、奈良、平安
18	末松 B 遺跡	野々市町 末松	弥生、奈良
19	末松 A 遺跡	野々市町 末松、中林	縄文、弥生、古墳、奈良、平安、中世
20	末松ダイカン遺跡	野々市町 末松	縄文、弥生、古墳、奈良、平安、中世
21	史跡末松廃寺跡	野々市町 末松	弥生、古墳、奈良、平安、中世、近世
22	大館館跡	野々市町 末松	平安、中世(室町)
23	末松砦跡	野々市町 末松、中林白山市木津町	不詳
24	古元堂館跡	野々市町 末松	不詳
25	末松 C 遺跡	野々市町 末松	奈良、平安
26	末松古墳	野々市町 末松	古墳
27	法福寺跡	野々市町 末松	不詳
28	三浦高麗野遺跡	白山市 三浦町	中世(鎌倉)
29	上二口遺跡	白山市 上二口町	古墳、奈良、平安
30	下新庄アラチ遺跡	野々市町 上林、新庄	古墳、奈良、平安
31	下新庄タナカダ遺跡	野々市町 新庄	奈良、平安
32	上林新庄遺跡	野々市町 上林、新庄	縄文、古墳、奈良、平安
33	上林古墳	野々市町 上林	古墳(後期)
34	上林テラダ遺跡	野々市町 上林	奈良
35	上新庄ニシウラ遺跡	野々市町 新庄	古墳、奈良
36	上林遺跡	野々市町 上林	弥生、平安
37	法蓮寺跡	白山市 木津町	不詳
38	安養寺遺跡	白山市 柴木町	弥生、奈良、平安
39	部入道 A 遺跡	白山市 部入道	奈良、平安
40	熊野遺跡	白山市 熱野	平安、中世
41	部入道 B 遺跡	白山市 部入道	奈良、平安
42	部入道 C 遺跡	白山市 部入道、熱野	奈良、平安
43	新荒屋遺跡	白山市 新荒屋	奈良、平安
44	柴木東遺跡	白山市 柴木町	奈良、平安
45	柴木 D 遺跡	白山市 柴木町	奈良、平安
46	柴木南遺跡	白山市 知気寺 柴木、部入道	平安(前期)
47	道法寺遺跡	白山市 道法寺	奈良、平安
48	道法寺 C 遺跡	白山市 道法寺	平安
49	道法寺 B 遺跡	白山市 道法寺	奈良
50	坂尻遺跡	白山市 坂尻	奈良、平安
51	知気寺 B 遺跡	白山市 知気寺	平安
52	荒屋 B 遺跡	白山市 荒屋	弥生
53	荒屋集落遺跡	白山市 荒屋	平安
54	知気寺遺跡	白山市 知気寺	平安
55	荒屋遺跡	白山市 荒屋	縄文、弥生、古墳
56	道法寺南遺跡	白山市 道法寺	平安
57	井口 B 遺跡	白山市 井口	不詳
58	安養寺 B 遺跡	白山市 安養寺	平安
59	安養寺 C 遺跡	白山市 安養寺	平安
60	田地古墳	白山市 田地町	古墳
61	菅波遺跡	白山市 菅波町	中世
62	来同本覚寺跡	白山市 中ノ郷	中世
63	園ノ道観館跡(藤木氏館跡)	白山市 藤木町	不詳
64	林四郎左工衛門館跡	白山市 向島町	不詳
65	乾町三月田遺跡	白山市 乾町	中世
66	中興・長竹遺跡	白山市 中興町、長竹町	弥生、古墳、奈良、平安、中世
67	幸明おとまる遺跡	白山市 幸明町	不詳
68	福正寺ゴコメマチ遺跡	白山市 福正寺町	古墳、奈良、平安、中世
69	橋爪 B 遺跡	白山市 橋爪町	弥生、奈良、平安、中世
70	橋爪 A 遺跡	白山市 橋爪新町	弥生～中世
71	橋爪新 B 遺跡	白山市 橋爪新町	弥生～中世
72	末松しりわん遺跡	白山市 末松	奈良、平安、中世
73	木津遺跡	白山市 木津町	弥生～中世
74	安養寺念仏林遺跡	白山市 安養寺	中世
75	七原町 A 遺跡	白山市 七原町	弥生、平安
76	七原町 B 遺跡	白山市 七原町	不詳
77	井口遺跡	白山市 井口	縄文(晩期)
78	堀内館跡	野々市町 堀内町	弥生、中世、近世
79	三納トヘイダゴシ遺跡	野々市町 三納	平安、中世
80	藤平田ナカシギ遺跡	野々市町 藤平田、三納	不詳
81	三納アラミヤ遺跡	野々市町 三納	奈良、平安
82	三納ニシヨサ遺跡	野々市町 三納	中世

木ジワリ遺跡が知られているが、町域では扇端部の押野大塚遺跡と御経塚遺跡ツカダ地区でわずかにみられる程度である。その後、中期後半になると、押野タチナカ遺跡でようやくまとまった土器群が出土した竪穴建物が確認されるが、しかし後の後期後半から始まる集落遺跡の爆発的な増加につながるものではなく、周辺は再び歴史的空白期間をはさむこととなる。後期後半以降になると、確認されている遺跡の数は飛躍的に増大する。このことは、鉄器の普及や農業技術の進歩による生産力の向上から人口が増加したことを示しており、人口密度過多の解消や安定した生活環境を維持するために、新たな耕作地を求めて中・小規模の集落が周囲に分散していったものと考えられる。この時期の代表的な集落として、金沢市の畝田寺中遺跡や南新保D遺跡、扇端部の御経塚遺跡群や二日市・三日市遺跡群、高橋川の自然堤防上に連なる集落群などきりがながないが、注目されるのは御経塚シンデン遺跡や二日市イシバチ遺跡、横川・本町遺跡、白山市旭遺跡群など続く古墳時代初頭において古墳群を造営する勢力が醸成されはじめたことである。次に、扇中央部に目をやると、標高60m前後を測る位置にある白山市荒屋遺跡、七原町B遺跡や40m前後の野々市町上新庄ニシウラ遺跡、末松廃寺、白山市上二口遺跡などが知られている。この内、上新庄ニシウラ遺跡では弥生時代末から古墳時代初頭にかけての竪穴建物4棟、掘立柱建物2棟が確認されており、周囲の遺跡に比べれば一応集落としての体裁は保っているが、それでも各建物に建替えの痕跡や重複はみられず、せいぜい1世代程度の短い存続期間であったと思われる。このことは、手取扇状地扇中央部に特有の地下水位が低く高燥で、少し地面を掘り下げれば石が表出するという地勢と無関係ではあるまい。当時、鉄器が普及したといってもまだまだ集落の構成員全員にまでは行き渡っていなかったことは、各地で行われた発掘調査で出土する鉄器の量をみれば明らかである。加えて、高地であるがゆえに急峻な流れの小河川を利用して用水を開削することは、高い灌漑技術と相当な労働力を必要としたと考えられる。末松廃寺に近い白山市木津遺跡にみられる数度の洪水の痕跡などとあわせ、厳しい自然環境は容易に人々を受け入れなかったようである。



弥生時代後期の竪穴建物



弥生時代後期の土器群

古墳時代～古代 古墳時代初頭から前期にかけて、扇端部に位置する御経塚シンデン古墳群や二日市イシバチ遺跡、白山市横江古屋敷遺跡・旭遺跡群などでそれ以前の大規模な集落の近くもしくは同じ地点に、前方後方墳と方墳を主体とした古墳群が築かれるようになる。この内、旭遺跡群は弥生時代末から続く周辺首長の墓域とみられ、山陰地方との関係を示す四隅突出墳も確認されており、その成立の背景に興味もたれる。この時期、扇中央部においては目立った動きは確認されていない。その後の展開は弥生時代にみられた状況とよく似ており、古墳時代中期後半の集落跡として御経塚遺跡に若干の



御経塚シンデン古墳群1号墳

痕跡がみられる程度であり、周辺は再び歴史的な空白期を迎えることとなる。

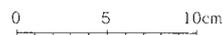
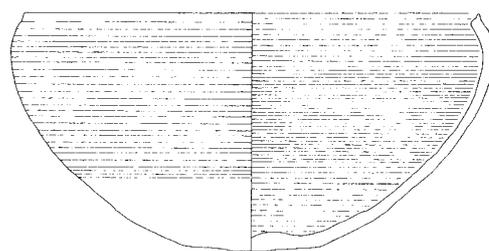
次に手取扇状地を含む周辺地域に人々の足跡が記されるのは、7世紀初め～前半代である。まず扇端部に目を向けると、御経塚遺跡や同ツカダ地区、白山市横江A遺跡などがこの時期に開始されるものの短期間で廃絶される例としてあげられ、以降しばらく継続して営まれる例として白山市東相川遺跡や北安田北遺跡がある。扇中央部では白山市三浦遺跡などがこの時期以降継続して営まれる。また、末松廃寺の北東側一帯に広がる末松福正寺遺跡や末松ダイカン遺跡ではこの時期の竪穴建物や土器が若干確認されているが、水路築造部分の細長い範囲での調査であったため、廃寺建立前夜の様相を知ることはできない。また、ここから南東へ約1.4km離れた地点に広がる野々市町上林・新庄遺跡群では、最大の集落跡である上林新庄遺跡西端より竪穴建物5棟と数棟の掘立柱建物が散居村的景観ながら確認されており、この時期に廃寺周辺の開発が本格的に開始されたと考えられる。周辺で発見されている上林古墳や白山市田地古墳、また、

古墳と伝えられる末松の大兄八幡神社に所在する末松古墳などの終末期古墳の存在や、末松地区に残る「塚」の付く小字名は、他にも数基同様の古墳が存在していたことを示唆するものであり、それらは後の発展の基礎を築いた

開発領主層の壮大な記念碑であるといえる。その後、7世紀後半になると周辺での遺跡確認例は急増し、標高25m前後に位置する白山市米永古屋敷遺跡や30m前後の上二口遺跡、野々市町末松遺跡群や40m前後の上林・新庄遺跡群など、山島用水系中流域から富樫用水系の扇中央部にかけて、扇状地を東西に横断するように多くの遺跡が開始または隆盛し、末松廃寺が建立される。近くに広がる末松遺跡群では7世紀後半以降8世紀半ばにかけて集落としてのピークを迎え、9世紀半ばまでには衰退へ向かう。また、上林・新庄遺跡群では7世紀前半に誕生した集落が、続く後半以降急速に拡大し、8世紀には下新庄アラチ遺跡を中心とする北エリアと上林新庄遺跡を中心とする南エリアに整理される。前者の成立は後



上林古墳（7世紀前半）



鉄鉢



上段：稜塊 下段：円面硯

者より若干遅れるものの、最初から核となる大型建物（竪穴建物から掘立柱建物へと同じ場所で推移する）を中心に、条里を思わせる区画溝や整然と建ち並ぶ倉庫群・副屋を配置し、エリア南端には門を思わせる長大な掘立柱建物をもつ。門状建物周辺より特徴的に出土する鉄鉢（仏器のひとつであり金属器を模写した土器）や、区画溝から出土した稜塊（鉄鉢に同じ）・円面硯（土器で作ったすずり）などの存在は、このエリアの成員が仏教を取り入れ、木簡などに何らかの記録を残す必要のある立場にあったことを示しており、極めて政治色の強い集団であったことを思わせる。これに対して後者は竪穴建物群の周囲を掘立柱建物群が取り囲むような配置をみせる。竪穴建物の多くはそばに長さ3.5～5.5m、幅1.4～2.5m、深さ0.1～0.3mほどの長方形の土坑を伴っており、中から鉄滓（製鉄した時の不純物）やフイゴの羽口、小刀もしくは釘状の鉄製品が出土している。一角に製鉄炉と思われる土坑が1基確認されていることとあわせ、このエリアの成員は小鍛冶あるいは製鉄作業に従事した集団である可能性が高い。これらのことから、遺跡群全体としてみれば北エリアに居住する政治色の強い集団主導のもと、南エリアでの計画的な製鉄従事者集団の管理運営を行うという極めて合理的かつ先進的な内容をもつものであったことが考えられる。周辺に想定されている古代「拝師郷」の中核といっても過言ではなからう。

一方、これまでこの時期の遺跡は希薄と考えられていた扇状地扇端部でも、最近の発掘調査成果から古代の集落跡が存在することが明らかになってきた。縄文時代から中世にわたる広大な野々市町三日市 A 遺跡では、2003（平成15）年に古代の官道である北陸道と思われる道路状遺構が確認され、その後の調査で現在では延長約530mの区間で直線的に伸びる姿が復元される。また、それに連動するように周辺でも古代の集落跡の確認例が増加しており、2005（平成17）年には北陸道から約150m（1町半）北に離れた地点で8世紀代の8×2間の大型掘立柱建物が1棟確認されている。この建物は、方位にとらわれることなく軸線を直行させる向きで建てられており、周囲に小・中型の掘立柱建物数棟と南北に並ぶ倉庫2棟を従えている。その建物規模や構成から一般の集落とは考えがたく、北陸道の管理やあるいは郷・駅家に関連するなど公的な性格をもった施設である可能性が高い。

8世紀後半以降、周辺での遺跡確認数はさらに増加し、古代集落の動向上ひとつのピークをなす。扇端部及び沖積低地では横江庄遺跡や上荒屋遺跡といった初期荘園関係の遺跡が開始され、それ以前より継続するものもさらに内容を充実させる。しかし多くは9世紀半ば以降10世



古代北陸道（三日市 A 遺跡）



大型掘立柱建物（三日市 A 遺跡）

紀には終わりを迎え、その後は徐々に扇状地の中でもさらに手取川に近い地域に移って行く傾向がみられる。

中世 中世の集落に関しては、町内では旧来の集落に重複する例が多く、その成立時期を知る手掛りとなっている。このような中、野々市町の本町地区において、1994（平成6）年に加賀の国司であった富樫氏の館跡内堀の調査が実施され、土器類とともに手鏡1点が出土している。また、町の東部に位置する扇が丘ハワイゴク遺跡では、1997（平成9）年の調査で加賀地方でも最大級の規模となる8×6間の大型掘立柱建物が確認されており、富樫郷の一角を所領とした有力武士の館跡と考えられている。このほか中世前期のものとして白山市三浦・幸明遺跡や橋爪ガンノアナ遺跡などでも高級陶磁器類が多く出土しており、開発領主クラスの居館と考えられている。廃寺周辺では、粟田遺跡や三納ニシヨサ遺跡、三納トヘイダゴシ遺跡などが南北に連なるように分布しており、当時の散居村的な景観を思わせる。また、扇端部では現在の二日市町の南側に広がる三日市A遺跡北ブロックで、大きな堀割やたくさんの井戸をもつ館跡と五輪塔が多く出土した方形台状の墓域などが確認されており、やはり有力な領主層の存在が想定できる。同様のことは三日市町・徳用町においても確認されており、やはり旧来の集落に近接して中世の居館・集落が検出されている。特に徳用クヤダ遺跡では、中世の北国街道が南側の近くを走っており、陶磁器類や石造遺物に上質なものが多くみられる。



富樫館跡の堀跡



中世方形台状墓（三日市A遺跡）

2 末松廃寺の調査成果

概要 末松廃寺跡は1939（昭和14）年に史跡に指定されており、したがって1966・67（昭和41・42）年に本発掘調査を実施した時点では、遺跡の性格の解明と将来の整備に向けた学術発掘であった。そのため、遺構の破損、破壊を最小限にとどめるために必要な地点のみを掘り下げるトレンチ調査として実施している。確認された遺構は創建当初のものとして塔・金堂及びこれらを取り囲む土塀であり、ほかに7世紀中ごろの竪穴建物1棟、8世紀～9世紀初めにかけてのものと思われる掘立柱建物4棟、塀4条及び金堂上層遺構などがある。

金堂は南を正面として建つと考えられ、創建時の伽藍配置は塔・金堂が建物の中心をそろえて東西に並ぶ、いわゆる法起寺式といわれるもので、廻廊のかわりに土塀が周囲を囲んでいたと考えられる。なお、北に存在すると思われた講堂は確認されなかった。

塔 (SB1) 塔の基壇は黄褐色の地山の上に暗褐色の粘土を突き固めて造られており、心礎据え付け穴を中心に東西約8.5m、南北約10.5mの範囲に残されていた。しかし、上面及び周縁部は徹底的に破壊されており、基壇化粧や雨落溝については不明であった。したがって、基壇の大きさや高さについては確認することができなかった。心礎はこれまでいわれていた青戸室石ではなく、手取川の転石と思われる安山岩を用いており、長径2.24m、短径1.65mのほぼ楕円形の自然石の上面を平らに加工したものである。この平坦面の中央には径58cm、深さ11cmの丸い穴が開けられており、ここに主柱を固定したものと考えられる。心礎以外の礎石もすべて抜き取られており、基壇土の残るわずかな部分に礎石据え付けの根石が4箇所確認されたのみである。手掛りは少ないものの、その位置関係に恵まれて塔の規模は方3間、各柱の距離が3.6mで一辺の長さが10.8mとなる大きなものであったことが推定された。また、心礎据え付け穴と根石の高さからみて、心礎は基壇上に上面が露出していた地上式のものと考えられる。



完掘された塔跡

金堂 (SB 2 A) 金堂についてはこれまでの予備調査により上面が破壊されていることが確実なため、基壇の規模を確定するために周縁部について重点的に調査を行った。その結果、屋根の形に沿って崩落したと思われる瓦堆積を取り除いた下に、雨落溝と思われる素掘りの溝が確認された。この溝の内側30cmあたりから、基壇土と思われる土がさらに内側に続くことから創建当初の金堂の規模を推定することができた。その結果、東西約19.8m、南北約18.4mの矩形に近いものであり、上面の破壊が激しく建物構造は不明であるが、周辺に玉石が散乱していることから玉石積みであった可能性もある。



金堂跡と瓦堆積

再建金堂 (SB 2 B) 一応再建金堂としたが、建物の構造や詳しい性格などは不明である。SB 2 Aの基壇中央に東西13.5m、南北10.8mにわたって20cm大の玉石が一面に敷き詰められており、方位が金堂雨落溝や塔に比べて東に約11度ずれている。地固めの敷石と考えると、基壇全体でなく建物直下のみで地固めが行われたとも考えられる。

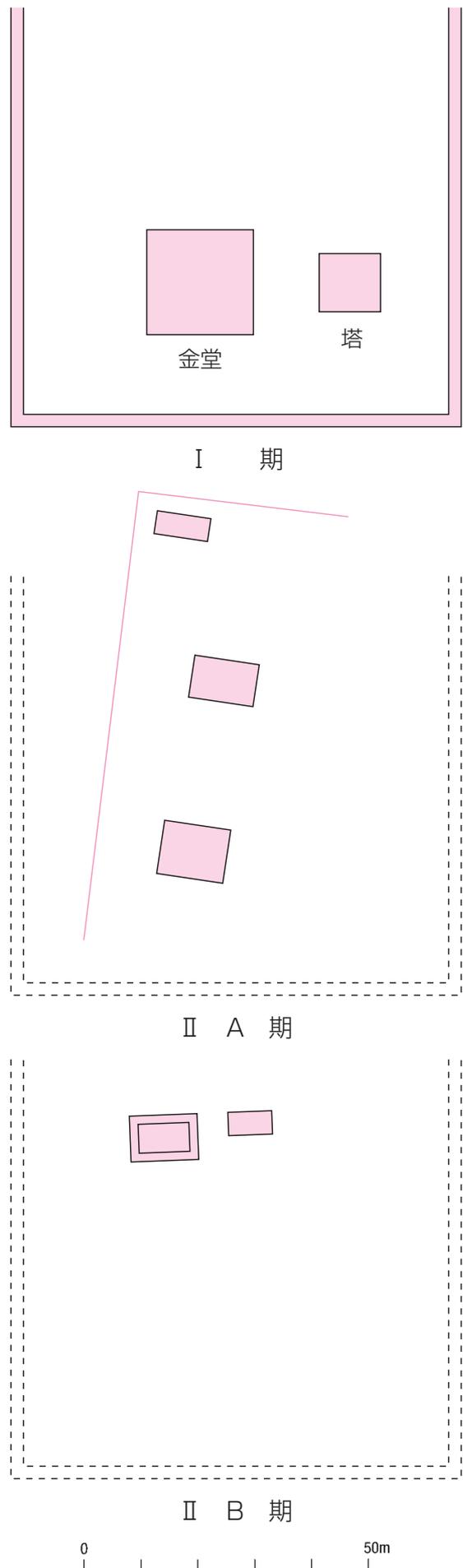
遺構の変遷 出土した遺物の検討や、建物遺構の切り合いと構成、方位軸などから、末松廃寺跡はI・II期に大別され、II期は建て替えによってA・B期に区分される。また、遺跡全体としては4画期5小期となる。

・ I 期 (創建期)

創建伽藍が存在した段階。塔(SB 1)、金堂(SB 2 A)、周囲を囲む土塀(SA 1～3)よりなる。本来北側に存在するはずの講堂については、調査区をやや大きく設定したが確認されていない。創建された時期としては、塔の基壇の下で確認された竪穴建物より7世紀第3四半期にあたる土器が出土しているため、それ以降、具体的には西暦660～670年を想定している。また、発掘調査により検出した金堂の瓦溜まりより、8世紀第1四半期の土器が出土していることから、このころまでには倒壊していたようである。

・ II 期 (再建期)

II期は、A・Bの2小期に分けられる。まずII A期は、廃絶された金堂の上に建てられた玉石敷きの再建金堂SB 2 Bと北側にある南面庇の掘立柱建物SB 3、さらに北側の掘立柱建物SB 6の3棟と、このころには土塀ではなく掘立柱に変わったと思われる柵列SA 4～7で構成される。それぞれ建物主軸をやや東に振り、SB 2 Bは規模を縮小して建てられている。塔は再建されなかったようであるが、9世紀前半～中ごろの瓦塔(焼き物で作ったミニチュアの塔)片が塔跡周辺より数点出土しているため、代替品として簡単な覆屋の中に納めたのかもしれない。存続した時期は、明確に遺構に伴う土器が出土していないため不明な部分が多いが、金堂が倒壊したと思われる8世紀第1四半期を上限とし、掘立柱建物の柱穴の掘り方



や規模から9世紀前半ころまでであろうと考えている。

ⅡB期は金堂北側に位置する掘立柱建物SB4・5の2棟からなる。SB4は四面庇の建物であり、堂宇と思われる建物は姿を消す。小堂のようなものとして存続していたのであろうか。建物の方位軸はⅠ期に近い。時期は9世紀前半を上限とし、10世紀代までの存続と考えている。これは、続くⅢ期に時期の確定できる遺物がある程度確認されていることによる。

・Ⅲ期（変動期）

Ⅲ期はそれまでの建物を主体とした構成ではなく、鍛冶遺構とされる土坑や南北に伸びる小溝、その他の土坑など、様相の異なる遺構によって構成される。時期は10世紀終わりころから11世紀前半を想定している。

・Ⅳ期（中世への転換）

SXとした中世墳墓などで構成される。この時期になると、生活に関係する遺構は確認できなくなるが、墓域として利用されていることから何らかの宗教的な施設として存続していた可能性も考えられる。時期は、11世紀中ごろから12世紀前半と思われる。

3 出土した遺物

概要 出土した土器は量的にさほど多くなく、確実に遺構に伴うと思われるものはごくわずかであり、出土地不明を含めて宗教的な性格を思わせる器種の存在も決して多くなく、その特徴に乏しい。そのため、廃寺特有の性格に迫ることは困難と判断し、出土地点から大まかに塔周辺地区・金堂周辺地区・推定金堂地区・北地区の4地区に区分し、出土遺物の量的推移や生産地別での供給量の推移など、数量的な検討に重点を置いた。

地区別にみた土器群の推移 全体的な遺物の出土量については、北地区に分布が集中する傾向がみられる。末松廃寺Ⅱ期とした8世紀第1四半世紀～10世紀には北地区以外で遺物量が極端に減少するが、北地区では大きな変動はなく、むしろ9世紀以降はわずかであっても増加させている。このことを、煮炊きに用いられる土器の種類でみると、そのほとんどが北地区に集中しており、そのような「器種」が使用される区域であったことを示している。ちなみに、供膳器・仏器以外の土器のあり方でも北地区の圧倒的な出土例が確認されており、廃寺内での用途区分の使い分けを反映したものとして留意する必要がある。

産地別にみた土器群の推移 この時期の主体をなす土器群（主に大陸系の焼物である須恵器）は、辰口地域で生産されたものを中心とし、加賀と能登の境に位置する押水・高松地域から南加賀の小松地域で生産されたものなど広範囲の土器が流通している。当遺跡からは確認されていないが、隣接する末松A遺跡では能登・鳥屋地域で生産されたものも確認されている。その内、この地域の通有の流通範囲は、これまでの他遺跡の検討結果より小松地域を除いた地域で生産された土器群の流通範囲とされてきたが、当遺跡では創建時とみられる7世紀後半ころに限り49%もの小松地域産の製品が確認される。このことこそが当遺跡におけるまさに「イレギュラー」な事実であり、その特異な状況が反映されているのではないかと考えられる。

4 まとめ

廃寺建立前夜の周辺地域は、末松ダイカン遺跡や上林新庄遺跡、上林テラダ遺跡などで7世紀前半代に集落の萌芽をみせはじめもののまだまだ散発的であり、該期の遺物を伴う竪穴建物などもごくわずかである。しかし、白山市田地古墳や野々市町上林古墳、また末松地区に残る「塚」の付く小字名の存在など、人口増加と耕地の拡大はやはりこの時期に始まったといえよう。廃寺が建立された7世紀第3四半期になると、上林新庄遺跡群などで徐々に竪穴建物などが増え始めるが、まだまだ8世紀にみられる爆発的ともいえる拡大には至らない。

廃寺は、創建伽藍がその威容を保っていたのはわずか半世紀ほどのことであり、7世紀第3四半期～8世紀第1四半期までのことである。この時期は周辺の集落遺跡が隆盛を極める時期にあたるため、その事情の理解を困難にしている。また、建立した主体については従来「道の君」であるという説が半ば定説化していたが、今回の検証によって加南・能美地域産の須恵器が多くみられること、これまで青戸室石であるといわれていた塔心礎が手取川の転石を加工した安山岩である可能性が高いこと、周辺の集落遺跡に近江・丹波からの影響が存在したことなど、ヒト・モノの動きに財部氏などの南加賀の勢力が大きく関係していることがうかがわれる。もっとも、当時の道の君の権勢を考えた場合、その存在の大きさを無視してこの周辺の開発を含めた大事業を成し遂げられるはずはなく、その関与のし方が注目される。

末松廃寺跡は、北陸ではもっとも古い時代に建立された古代寺院であり、全国的にみると白鳳時代にこうした寺院が建立される傾向が顕在化する傾向がみられる。その多くは新たな開発事業の施行に関わるものであり、本遺跡の例も先進的な技術を持った集団の移動を伴う、国家的一大プロジェクト推進の前段として人々の人心掌握を目的としたものであったと考えられる。白鳳寺院の建立の背景にまで踏み込んだ詳細な検討はまだまだ少なく、今回の検証を通して得られた新たな知見は今後の研究に新たな道を開いたものと評価できる。末松廃寺の建立は、この国家的開発事業の一連の流れの中でも早い段階の事例であり、その事情を解明することは、その後の加賀市弓波廃寺跡や羽咋市柳田シャコデ廃寺などの建立の背景を考える上で地域史全体の中でも大きな意義を持つものである。

おわりに、今回の検討を経て末松廃寺跡の建立に関わる経緯をある程度明らかにできたのではないかと考えている。しかし、これらはいくまで1つの論証であり、決して建立主体に道の君が関与していなかったとの確証は得られていない。本シンポジウムに参加された皆様の真摯なご討議を経て、この問題に対しての更なる深化を期待するものである。